

「ヌーラン事件」とコミンテルンの闇

鬼丸武士著

上海「ヌーラン事件」の闇

戦間期アジアにおける地下活動のネットワークとイギリス政治情報警察



A5判
258頁
書籍工房早山
[本体 2500円 + 税]

石井 知章

ヌーラン事件（一九三二年六月）について知る人は、中国研究者のあいだでも、そう多くはないであろう。尾崎・ゾルゲ事件に先立つ上海でのアジア最大のスパイ事件として知られ、イギリス帝国とコミンテルンが熾烈な攻防を繰り広げた結果、タン・マラカ、グエン・アイコック（ホーチミン）など、アジアの革命家が政治情報警察によって一網打尽となった国際的逮捕劇である。だが戦後、一九六〇年代の半ばになってもお、イギリスの情報機関をして、「上海にはその根がまだ残っている」と当時の警察庁次長、後藤田正晴に語らせるほど、その背景はいまだに多くの謎に包まれている。本書は、アメリカ国立公文書館所蔵の資料、『上海工部局警察資料一八九四―一九四九』のファイルを足がかりとして、この事件の中心人物であるイレール・ヌーランを介して繰り広げら

れた国際的ネットワークの実態を解明しようと試みるものがある。本書はまず、これら逮捕劇をめぐる当時の社会状況・人間関係に焦点をあて、ヌーランとはいったい何者であり、上海で何をして、そしてなぜ逮捕されたのかについて追究する。そのうえで、上海を中心として東アジア、東南アジアへと拡がった国際共産主義運動の地下活動ネットワークの全体像を明らかにしていく。

ヌーランは、ベルギー人アントワーヌ・ラングレの名で二八年に上海にやってきて、コミンテルンのエージェントたちの会合場所の設置や通訳、極東局技術部の仕事に従事し、さらに中国や日本の都市を国際連携部の仕事で訪れるといった任務に就いていた。とくに佐野学との関係は深く、二九年六月、佐野が上海で国民党の警察に逮捕されて日本の警察に

引き渡されると、ヌーランもいったんは上海を離れることを余儀なくされる。警察による佐野に対する予備尋問調書の供述では、ヌーランとの関係性を意図的に隠そうとする佐野の政治的判断が読み取れることから、当時の上海のコミンテルン代表が当時すでに名の知られていたブラウダーではなく、ヌーランであったと著者はみる。この背後にあるのは、日本との広く、かつ深いさまざまな人的関係性である。たとえば、佐野は周恩来の仲介によりヌーランとの接触を果たしていた。上海に来た渡辺政之輔や鍋山貞親、佐野博などの動向をヌーランから聞き、さらにウラジオストクの汎太平洋労働組合書記局を運営していたヤンソンからの置手紙を受け取っている。ヌーランは、佐野と日本との間の連絡を担当し、また佐野とともに反帝同盟の準備会合を中国共産党中央委員であった向忠発、李立三、ワイリピン代表のアブラハムらと開催している。こうして官憲に追われていた佐野を、「北京の哲人」と呼ばれ、また鈴江言一の師でもある中江丑吉（中江兆民の長男）がかくまったことはよく知られている。

東アジア、東南アジア地域の共産主義運動にとつて、上海を中心としたコミンテルン支部のもつネットワークの構築と維持は、その活動の根幹にかかわる重要課題であった。とくに、モスクワからドイツを経由して上海に送られた資金は、

極東局のスタッフの給与、日本や東南アジア各地への補助金、エージェントの旅費、維持費、通信費、さらには東方勤労者共産大学（モスクワ）への留学生の派遣などの費用に支出されている。ヌーランが属していた国際連絡部とは、まさにこうした連絡線を担当する組織であった。ヌーランが検挙された際には、彼が郵便私書箱一〇個、そして電信のアドレス八個を所有していたことが明らかになっている。

コミンテルンとの連絡は、ほとんどが暗号を使ってやり取りされていた。日本との連絡には、私書箱一〇七七号が使われ、風間丈吉が上海を訪れた際、正式に中間指導機関との連絡アドレスと定められ、日本側のアドレスは風間が上海を訪れるにあたって使用された変名、三省堂編集部の本本慎一宛てとし、より確実なアドレスが決まれば連絡することになっていた。伝書使による日本以外の地域との連絡幹線は、上海から香港、サイゴン、バンコク、シンガポール、ラングーン、カルカッタへと延びていった。また、この幹線から分かれた支線は、香港からアモイを経由して台湾の基隆、マニラ、バタヴィアへとつながるルート、さらにサイゴンからハイフォン、雲南、英領ビルマへとつながるルートへと抜けている。しかし、こうしたネットワーク作りは、もちろんヌーラン一人ではできないことではない。それらを有効に機能させるためにも、ゲエ

ン・アイコック（ベトナム）、タン・マラカ（インドネシア）、鈴江言一（中国・日本）といった協力者の存在が不可欠であった。とりわけ、このネットワークにおける鈴江言一の活動とその政治的役割はそれなりの注目に値する。一九二二年の結党以来、東アジア、東南アジア地域の他の共産主義運動と同じように非合法状態で活動していた日本共産党は、二八〜二九年の大規模な取締りにより壊滅的打撃を受けていた。二九年の佐野の逮捕でコミンテルンとの連絡そのものが絶たれたものの、この連絡線の再構築をおこなうべく、一九三一年二月、上海から秦貞一という「中国人」がやってきて、活動費一〇〇〇円、派遣旅費一〇〇円を党関係者に手渡すと、さつさと上海へ戻ってしまったという。この秦こそ、じつは鈴江言一、その人であった。鈴江は二七年、武漢政府で中国共産党員として働き、同年、武漢で開催された第一回汎太平洋労働会議では、王子言の名で总工会の地区代表として参加し、流暢な中国語で演説している。その後、反共クーデタから逃れるために中江のいる北京にいったん帰るが、二九年には上海に戻り、この年には『中国無産階級運動史』を出版するほか、『改造』や『批判』などの雑誌に、王子言、野村新一郎などのペンネームで時事評論を執筆し、さらに三一年には、『孫文伝』を王枢之の名で改造社から出版している。

一方、三〇〜三一年にかけて東南アジアに連絡線のネットワークを拡大するにあたって、すでにグエン・アイコックやタン・マラカは、同地域の共産主義者の間では著名な活動家として知られていた。いいかえれば、植民地統治をおこなう側、とくに仏領インドシナ当局、蘭領東インド当局にとって、彼らは最大の「お尋ね者」であったことになる。三一年を機に中国共産党への依存から脱却すべく、東南アジア地域へ独自のネットワークを拡大することは、ヌーランをはじめとするコミンテルン要員にとって最大の課題となっていた。その構想の実現のため、シンガポールを同地域の拠点として、さらに英領インドとの間の連絡線を確立するためにヌーランが送り込んだのが、フランス人、デュクルーであった。デュクルーは、三一年二月、シベリア鉄道で大連を経由して上海に到着し、ヌーランと接触すると、翌月には新たな任務を帯びて香港へ移り、そこでグエン・アイコックと会見している。その後、サイゴンへ向かい、インドシナ共産党のメンバーと会っているが、最後に到着したシンガポールで居を構えたものの、三一年六月一日、すでに早くから情報をキャッチしていたイギリス帝国治安維持システム下のシンガポール犯罪情報局によって逮捕された。

ところが、彼が所持していた手帳に上海のヌーラン、そし

て香港のグエン・アイコックの名と連絡先が記されていた。これらの情報をもとに、同年六月六日にはグエン・アイコックが、そして一五日には上海でヌーランとともに逮捕されるにいたる。ヌーランの逮捕時に押収された三つの鋼鉄製の箱には、汎太平洋労働組合書記局の収支簿、多くの外国語、そして暗号で記された手紙、電報、報告書、メモなど、大量の人名を含む文書が収められており、ヌーランやそのスタッフらの活動だけでなく、東アジア、東南アジアへ張り巡らされたネットワークを一举に壊滅に追い込むための情報が、すべてイギリス帝国官憲側にわたってしまったことになる。もう一人のコネクターであるタン・マラカが三二年一〇月、香港で逮捕されたのも、まさにこれらの情報をもとにしていることである。

こうした一九二〇年代から三〇年代にかけての東アジア、東南アジア地域におけるコミンテルンの活動に関する先行研究としては、すでに栗原浩英『コミンテルン・システムとインドシナ共産党』（東京大学出版会、二〇〇五年）、「初期コミンテルンと東アジア」研究会編著『初期コミンテルンと東アジア』（不二出版、二〇〇七年）、山内昭人『初期コミンテルンと在外日本人社会主義者』（ミネルヴァ書房、二〇〇九年）などがあるが、いうまでもなく本書は、ヌーランを中心とする国際的ネットワークとそれを執拗に追いかけるイギリス帝国など

官憲当局との攻防についてまとめた最初の、そして唯一の著作である。一次史料にもとづく綿密な調査と、それにもなう具体的史実への詳細かつ多面的確認作業のプロセスは、著者の並々ならぬ執念といったものを感じさせるには十分であり、それ相当の時間と労力が費やされたことが容易にみ取れる。当時の上海におけるもうひとつのグループであるリヒャルト・ゾルゲ、尾崎秀実、アグネス・スメドレーのラインでは、これまでも汗牛充棟たる研究の蓄積がある。だが、ゾルゲとヌーランとの接点でいえば、本書はさらに、ヌーランの連絡機関に所属した軍事アドバイザーとの親交が一部あったものの、お互いがその任務には一切干渉しなかったという新たな事実を明らかにしている。これは著者独自の功績として評価されるにふさわしい。いいかえれば、同じ壮大な目的を共有しつつも、コミンテルンは末端グループのレベルでは、相互連帯どころか一切没交渉であった（あるいはそうさせられていた）ことになる。それゆえに、本当の「闇」は上海にはなく、むしろモスクワにこそあるというべきなのかもしれない。その意味で本書は、ヌーラン事件の謎を追いかけることで、コミンテルンの組織・活動そのものの闇を照らし出しているといえる。

（いしい・ともあき 明治大学）